

ばあちゃんとお婆ちゃん



夏休みが始まって一週間ほどして、かあさんがいきなり「明日の朝からばあちゃんといっしょに、花園橋バス停の斜め前にあるコンビニのとこまで歩いてちょうだい」と言った。

「え？ なんで」といったら、「このごろばあちゃん、いっこも外へ出たがらんから、朝だけでも散歩してもらいたいんよ」と、すまして言う。

「そんなん、かあさんがやればいいやん」

ぼくが抵抗したら、かあさんは、ちよっとキツネの目で、「私が誘うても、いっしょに歩いたりはせんわ。まごのあんたがお気に入りやけ、あんたがいっしょに歩いて」

それからかあさんは、「かあさん、あんたに、たのみよるんよ」と「あんたに」を強調した。かあさんの「あんた

に」が出たら、もうぜったい逃げられん。

ぼくが今、支度にばくちん時間のかかるばあちゃんを玄関に腰かけて待ちよるんは、そういうわけなんだ。

朝七時、ラジオ体操を終えた近所の連中がみんな姿を消すのを待ってから「ばあちゃん、散歩に行こうや」と声をかける。すると、ばあちゃんは「そうやねえ、ほんなら、行こうかいねえ」とうなづく。

けど、そこからは、長い。まず、ばあちゃんは、鏡の前へ行って、ブラシで髪の毛をとかす。ブラシで梳くと白髪がしゃばしゃばぬけるのに、三回も四回もブラシを動かす。それから、鏡を覗き込んで、右のほったを映し、次に左のほったを映し、それから、正面向きの顔をぐぐっと鏡に近づけて、鼻の穴に何かついていないか調べる。